

雪山主峰

--- 台湾第2の高峰を縦走 ---
(2008年5月の記録)

高田忠雄

日程：5月22日(木)～5月27日(火)(6日間)

参加者：高田良一、高田忠雄

行程：

- 5月22日 台北市健保大樓 → 坪林 → 宜蘭夜市 → 武陵農場 (宿車上或車站露宿)
- 5月23日 武陵農場 (1, 900メートル) → 煙聲瀑布 → 池有山登山口 (2, 200メートル) → 三叉營地 (3, 200メートル) → **池有山** (3, 303メートル、百岳) → 新達山屋 (3, 160メートル)
- 5月24日 新達山屋 → **品田山** (3, 524メートル、百岳) → 品田斷崖 → 布秀蘭山 (3, 438メートル) → 素密達山 (3, 517メートル) → 素密達山屋 → 穆特勒布山 (3, 333メートル) → 素密達山屋
- 5月25日 素密達山屋 → **雪山北峰** (3, 703メートル、百岳) → 雪北山屋 → 凱蘭特崑山 (3, 731メートル) → 北稜角 (3, 880メートル) → 雪山主峰 (3, 886メートル、百岳) → 翠池 (3, 000メートル)
- 5月26日 翠池 → **雪山主峰** (3, 886メートル、百岳) → 雪山舊址營地 → **志佳陽大山** (3, 289メートル、百岳) → 瓢潭池 → 苗圃舊址 → 溪底 → 松柏農場 → 環山部落 → 宜蘭 → 礁溪 → 台北市

台湾の山で知るのは玉山と雪山ぐらい。近くて行きたと思いながら、今まで機会が無かった。九州と同程度の面積に3,000メートル級峰が250座以上もあり、日本のアルプスにも似て、登山スタイルも日本に似ているらしい。山によっては登山許可が必要一。

高田(長)さんに機会をお願いしていたのが実現した。個人山行で登山許可を取るのは手続きも面倒で期間もかかるので、長さんの案で「台湾の山岳協会に入会して例会山行の参加で登山許可を得る」「台北縣野外育樂協会のホームページ」から入会(年会費1,200円)と山行参加をメールで申し込み、別文も郵送してもらった。なかなか返事が来なかったが～「入会承諾と登山許可申請中のメール」の後、長さんの会社へ「歓迎!」の電話があり、急いで航空チケットの手配をした。準備していて、台湾語の「山行計画書」など内容不明もあり、台湾観光協会大阪事務所へ出向いて教えて貰ったりして「飛び入り参加」の不安もあったが、長さんとは「今までの山旅では何とかなった～」と、樂觀もしながら～とにかく慌ただしく旅立った。

5月22日(木)

成田空港16:40 → 台北桃園空港19:00(時差マイナス1h) → 集合場所

空港外に出られたのが19:50。台北市内の中央健康保険局(病院)へ21時集合のため、遅れる訳にいかないので安価なりムジンバス(130元ー約500円)をやめて、タクシーで健保局へ

行くことにした。高速料金込みのため、メータ料金の50%増しで1,190円(約4,500円)もかかったが「明細記入の領収書」をくれた。外国のタクシーは、随分ええ加減が多いのに「こんな初めてやな」。賑やかな街角に中央健康保険局があり、向かい側にはサークルKやファミリーマートがあり、ちょっと離れて牛井の吉野屋もあった。日本の街と変わらない風景だ。

ロビーで待っていると、次々と大きなリュックをかついで集まって来た。頃合いをみて、その場へ行き「入会申請書」を見せながら「こんにちは！日本から来ましたー高田です」。隊長の蔡明吉さんや、数人が台湾語で「ちんぷんかんぷん？～わからない？」蔡さんは英語が話せて、高田(長)さんと会話OK。日本語で「オキヤクサマ」と声を掛けられたり歓迎の雰囲気を感じて、まずは「ほっと！」した。集まった参加者は20歳代から60歳代と幅広い年代だった。蔡隊長とスタッフで4名、会員参加が16名で、総勢20名。女性が3名いた。バスに乗り込み出発。蔡さんやスタッフが、マイクで挨拶や行程の説明をしているらしかったが、全く内容は分からず。私達を紹介してくれたところは分かったので、参加者に挨拶をして歓迎の拍手を貰った。

市街をしばらく走って夜市へ。あらゆる食べ物露店が並び、熱気がすごくて皆はそれぞれ店に入り何か食べていたが「これを食べよう」との気がしなかった。バスに戻って席に着くと、蔡さんが何か買って来てくれて「これ美味しいよ！」開けて食べると白玉団子や何か？いろいろ入っていて、少し甘くて冷たくて美味しかった。バスは発車して街を出て真っ暗闇に。今日はどこまで行くのか？計画書には「車上又は露営」と書いてあったが、とにかく少し寝ないと～「うつら～うつら～」バスは走り続けて～外が少し明るくなってきた。

5月23日(金)曇晴のち雨

武陵農場駐車場(1,900メートル)→煙聲瀑布(滝)→池有山登山口(2,200メートル)→三叉營地(3,200メートル)→池有山(3,303メートル、百岳)→新達山屋(3,160メートル)

5:00、広い駐車場着。寝不足でちょっと身体が「ふあ～」とする。湿気のあるヒンヤリした空気で目も覚めた。身支度後5:30いよいよ出発。共同食料の分配もあって、リュックが重い。沢山持ってくれた高長さんのリュックも重たそうで、みんなのリュックも大きい。全員がリュックカバーを付けていて、ゴム長靴の男性が数人いた。台湾は年間170日位雨が降るらしい。「雨は嫌だけど、台湾では雨を気にしていたら山は登れないよ」と。「いやいや、やっぱり雨は嫌や！！」雨ヤッケを着ている人も多く、もう雨の準備してんのかいな？

森林の整備された道をゆっくり登り、6:50池有山登山口で休憩。「この先に大きな滝があるので観てきた方がいい」と勧められたので5分程歩いて行くと、桃山の滝ー100メートル以上はあろう豪快な大滝で、滝壺の水煙が怖い位だった。戻って7:15出発。急に道が細くなり、台湾杉の巨木や原生林の中の本格的な登りが始まった。ペースはゆっくりで「リュックは重たいけどこれならついていけそうや」と感じた。8:10、国父峰鞍部(2,480メートル)から、さらにうっそうとした原生林内の急坂と2つの鞍部を越えて、ひたすら登った。蔡さんらスタッフが「ダイジョウブ？ゲンキ？」と声を掛けてくれたり、メンバー達も私らが珍しいのか「ニッポン」とか「コンニチハ」「トモダチ」「ナマエハ？」とか、話しかけてくれて、いつもと変わらない山の感じになってきた。

9:30、三叉幕営地着。4人用テントが3張り位の空き地で水も無い。皆は朝飯にするようだ。「台湾の人は山で何を食ってるのか？」と見ていると、「ラーメン・ポークビーンズの缶詰・魚肉の缶詰・魚肉の干し物・パン」など。特にポークビーンズの缶詰を食ってる人が多かった。各人のリュックは



相当重そうである。私らは「米飯（おにぎり）は無いがいつもどおりの物」ラーメンを炊く人、何人かが缶詰を食っているの「何の缶詰？」「ポークビーンズ」だった。蔡さんが「熱いコンソメスープ」をくれた。腹ごしらえが済み出発。段々樹木が低く細くなってきたが霧で見通しは無く、ひたすら歩く。霧雨で天候も悪くなってきた。分岐があり、リュックを置いて背丈程の林を登ると急に岩場に出た。

12:40、**池有山**（3, 303メートル）山頂。残念ながら霧雨で展望はない。皆が山名のプレートを持って写真。「トモダチ！」と言っは、僕と一緒にいっぱい撮ってくれた。13:10、分岐に戻って出発。後は下って～。14:15、宿泊地の新達小屋に到着。無人だが赤い三角屋根の2階建てで広くて綺麗。2階で寛いだ頃から雨が土砂降り。夕食は白菜やらの野菜と鳥、豚肉入りの炊込みに白米飯。味はまあまあ～。とにかく腹いっぱいまで食った。誰もお酒は飲まないんや。夕食時止んでいた雨が、また土砂降りに。「あしたこの雨やったらかなわんな」と思いつつ、そ〜と持参のウイスキーを飲みながら、初日の寝不足もあり、疲れを感じて寝袋に入っていたら眠ってしまった。

5月24日（土）曇のち晴

新達山屋 → **品田山**（3, 524メートル、百岳） → 品田断崖 → 布秀蘭山（3, 438メートル） → 素密達山（3, 517メートル） → 素密達山屋 → 穆特勒布山（3, 333メートル） → 素密達山屋

3:00起床。幸いにも雨は止んでいた。4:00、暗闇を出発。低木の道を登っている時、後ろで「うわっ!!」と大声がして振り返ると、誰かが足を踏み外して転げ落ちてヘッドランプだけが見えた。何人かが大声をかけていたが、本人は這いつくばって上がってきて幸いにも怪我はなかった。「自分も気つけなあかん」と緊張した。低木の岩道を登り抜けて、5:10、品田山前峰（3, 440メートル）。明るくなって東方の山群が一望できた。5:50、品田山前U谷の岩壁を下る。低木と岩の瘦尾根を登り返して、6:30**品田山**（3, 524メートル）山頂着。

これから歩く、布秀蘭山（3, 438メートル）～ 素密達山（3, 517メートル）～ 穆特勒布山（3, 333メートル）～ 雪山北峰（3703メートル、百岳）～ 凱蘭特崑山（3, 731メートル）～ 北稜角（3, 880メートル）～ 雪山主峰（3, 886メートル）の岩稜峰が雄大に続いていた。7:00、品田断崖を下る。今回山行コースのメインの一つである、ほぼ垂直の絶壁を下降。日本なら鉄製の梯子や鎖が設置してあるだろうが、何本かの古ぼけたロープで心許無い。まず一段目、1人ずつロープで簡易なセルフビレーをとって貰って降り、二段目はリュックを先に下ろして空身で降り、三段目、男性はセルフ無しで降りた。全員降り切ったのが10:00になっていた。振り返って見上げての断崖絶壁は「もうやりたくない」と思った。



榛松の岩稜を登り、10:30、布秀蘭山（3, 438メートル）。11:00、石楠花の群生した瘦尾根の岩道はどこも足元が悪く厳しい。12:00、ガレた岩場を登る。遠いが「カンカラカーン！」と乾いた音が時々～落石が怖い。12:30、素密達山（3, 517メートル）。12:50、素密達断崖を時々トラバースしながら岩場の下降が続いた。14:00、今日の宿泊地素密達山屋到着。一休み

後、空身で榛松の群生を這うように登って、穆特勒布山（3, 333メートル）を往復。15:30、小屋に戻って落ち着いた時は、今日は品田断崖と素密達断崖の降下や、背の低い石楠花の群生や榛松の瘦尾根の連続やったんで緊張が続き疲れた。持参のウイスキーを出して皆に「飲もう」と誘ったが、誰も「ノーサンキュー」。台湾では「山での酒はあかんのかいな？」と思いつつ、湯割りが胃の中で暴れた。

5月25日（日）曇晴のち雨

素密達山屋 → **雪山北峰**（3, 703メートル、百岳） → 雪北山屋 → 凱蘭特崑山（3, 731メートル） → 北稜角（3, 880メートル） → **雪山主峰**（3, 886メートル、百岳） → 翠池（3, 000メートル）

3:30起床。4:30、朝霧の中を出発。針葉樹林帯のゴロゴロ石を登り、5:30、一旦稜線に出たが又、岩石大崩の断崖を下る。7:00、岩と榛松の急坂を登りやっと稜線に出た。雪山連峰が続き360度の大展望。日本では見られない位の石楠花の群生尾根道が続いて見事な綺麗さと大展望で気分も良く、歩き慣れもしてきたのか快調。



8:10、**雪山北峰**（3, 703メートル）に着いた。何度も記念写真。9:00、雪北山屋 —ここで大休憩。スープやお茶もいっぱい貰ったので、これからも元気で歩けそう —10:00出発。榛松に足を引っ掛けないように注意しながら、石楠花に囲まれた急登尾根が続き、11:30、凱蘭特崑山（3, 731メートル）。森林限界を超えた岩尾根を風と霧の中、黙々と歩き13:30、雪山主峰手前の北稜角（3, 880メートル）。

14:00、雪山主峰下コル。風は強く寒い。右側斜面は殺風景な岩石のガレ場。左側斜面は見たこともない石楠花群の大カール—まさに絶景。リュックを置いて最後の斜面を登り、14:30、行程九つ目のピークで目的地 **雪山主峰**（3, 886メートル）に到着した。3日間かけて歩いてきた縦走路が上下して遥か遠くまで続いて見えた。14:50、主峰下コルに戻ったが、にわか天候が急変してポツポツ雨。コル右側斜面の岩石の坂道を下り切って、針葉樹の森に囲まれた翠池の山屋に15:40到着。すぐに激しい雷雨となった。

「運が良かった〜」と休んでいる中、いつも後方を遅れて歩いていた女性一人はスタッフが付き添って激しい雷雨の中を歩いているはずである。「大丈夫かいな？」と心配していたが、蔡さんも他のスタッフと心配そうに「何やら相談」していた。強そうな若い連中が迎えに行ったようだ。大分経ってから「ずぶ濡れで」到着した。みんな拍手で迎えた。女性は笑顔だったが相当身体も冷え疲労している様子だった。着替えて熱いお茶を飲んでシュラフに入り、すぐに「おおきなイビキをかき出したので」笑えた。外は相変わらず激しい雷雨が続き土間も床も濡れてしまった。食事の後リーダーが「明日の行程の変更」をみんなに説明している様子だったが、分からなかった私達には、英語で説明してくれた。変更の理由は「明日の天候も良くないので稜線歩きは危険。雪山下コルからカールを経て、雪山一般

道を武陵農場へ下る。安全第一なので理解してほしい。勿論了解であり「正直、ほ～とした気分」もあった。何せ、とんでもない雷雨である。

それならと、みんな手持ちの食べ物やらを出して賑やかになってきた。私達も持参の副食行動食を出すと、若者が気に入った物だけ選んで美味そうに食っていた。僕がウイスキーを飲んでいると、道中いつも声をかけてくれて、ちょっとだけ日本語を話す康さんが「少しかけウイスキーをください」と言ってきた。「どうぞどうぞ」と、コップに「ドボドボ！」と入れてあげると「多すぎる」と言いつつ自分のシュラフに戻って飲んでいて。みんな疲れが出ているのさだろう —1人また1人とシュラフに入って眠った。

5月26日(月)曇のち雨

翠池(3,000メートル) → 雪山下コル → カール → 三六九山荘(3,690メートル) → 雪山と右方(3,201メートル) → 七本山荘(2,510メートル) → 武陵農場(2,000メートル)

4:00起床。雨は止んでいた。5:00出発。オアシスの様な針葉樹林帯を抜けて、昨日下った岩石の急坂を登り返して7:40雪山下コル着。昨日、遅れて着いた女性は空身で休みながら登っていたが、だいぶ下で相当時間がかかりそうであった。強そうな若者が大リュックを2つ担いで登ってきた。厚い雲の合間から朝日の光が僅かに感じられ「あんな雨は降らないで！」と祈った。日本では観られない程の石楠花を敷き詰めたように咲く大きなカールを、みんなあちこちにばらけてルンルン気分を下った。カールを降り切ったところに記念碑があって「日本の統治時代に鹿野忠雄という人が、始めてこの地に立入って調査した」みたいなことが記されていた。整地された登山道に入り緩やかに下って行くと雪山の日本人ツアー登山でも往路か復路で宿泊する三六九山荘に9:30着いた。大きい建物の宿泊施設だが寝具は無し。水場も無いが雨水タンクが有り、自炊棟には携帯用のガスとボンベや鍋類に食材もが雑然と置いてあった。

台湾の登山客が沢山いた。急に激しい雨となり待機の大休憩でみんな腹ごしらえ。登る予定の人も足止めをくらっていた。休んでいると、男女達がカタコト日本語で「あなた日本人ですか？ 私日本へ行きました。東京、京都、富士山へ登りました etc ~中には自転車のロードレースで北海道、札幌へ行きました」とか「登山衣服のメーカーの話」とかして来て、とても好意的だった。激しい雨は止まず11:00出発。傘を持ってきて正解やった。12:30、行程10個目のピーク雨霧の雪山東峰(3,201メートル)。

下るに従って小雨になり、登山道も良く整備されたハイキングコースのようになってきた。その内に雨はすっかり止んで、登山客が次々と登って来た。15:30、武陵農場に到着して全行程を終了した。相当な時間待たされたが、遅れていた女性もスタッフに付き添われ無事到着した。迎えのバスに乗り22:30、台北市健保局前に帰着。蔡隊長やスタッフ参加者ともに挨拶して再会を約束して別れ、近くのYMSAホテルに入った。

5月27日(火)

台北市(シャトルバス) = 桃園空港 = 成田空港

日本アルプスを麓からも少し迫り上げた様な、高度感のある台湾の山でした。行程は「結構きつかった」が実感でした。高低のある10座の縦走は歩き応え十分で、幾つかの断崖の下りは緊張しました。それにあの雨に途中出会うと恐怖です。

台北懸野外育楽協会は組織、運営、指導者、スタッフもしっかりしていて今回の参加者のレベルも高かったように思います。台湾の登山愛好者は、それなりの富裕者層の趣味と思われました。装備や衣服も、ミレーやモンベル他、日本でも馴染のメーカー製を持っていました。蔡明吉隊長は電子工学科の博士教授とのこと。他に商業大学の先生で教え子が日本や各国で活躍しているとか、自然環境局員とか、エリートが集まりのようにも感じました。みんな好意的で「台湾の人は日本人の感性に合うなあ」とも思い、彼らとはまた一緒に登山がしたいと思いました。高田長さん、また台湾の山誘って下さい。みなさんも一緒に行きましょう！

